

北海道各地から産出する黒曜石
その13るべしべちいき
留辺蘂地域

(Rubeshibe Area)

この地域では、以前、黒曜石の分布調査をしていた時、丸瀬布町の武利川や留辺蘂町厚和地区のケショマップ川から、黒曜石の転石を見つけ採取していました。従って、それらの噴出源が分水嶺付近にあるのではないかと調査を進めていたことがありました。やがて、その2年後に白滝村の学芸員の方などに誘われて、留辺蘂地域を案内して頂きました。すると、数多くの黒曜石の礫を採取できる場所や黒曜石の露頭がある場所を教えて頂き、驚いたことがあります。

ケショマップ川、武利川、七ノ沢それぞれの上流域には、鮮新世末期～更新世にかけて噴出したとされる武利溶結凝灰岩がひろく分布しています。厚和地区から直線距離にして、北西約7.5km地点では、現地調査で確認できたように、1,019mのピークとする山の標高約810～850m付近に、少なくとも上下2枚の厚さ約1.0m程度の黒曜石溶岩の層が見られます。留辺蘂地域では、2つの組成グループに分類されますので、この周辺が留辺蘂Ⅰ・Ⅱ組成グループの噴出源に相当するのではないかと考えられます。

ここでは、溶岩流の露頭が直接観察できることもあり、人頭大以上の大きなものも採取可能です。漆黒色を呈し、貝殻状断口になり石器の材料として適しています。それなりのまとまった量が産出するので、周辺地域では石器の材料として、かなり使用されていた可能性があります。

留辺蘂地域で産出する黒曜石について、ひとつ気になる点があります。それは、留辺蘂Ⅰ組成グループが旭川Ⅰ組成グループに酷似しているということです。割れ面もよく似ています。これまでの詳細な調査でも旭川Ⅰ組成グループの噴出源は知られておらず、「もしかすると、峠を越えた留辺蘂組成グループと同一の噴出源かもしれない・・・」。大昔の地殻変動を想像して考えるのも黒曜石研究の醍醐味です。
(学芸員 向井 正幸)



この露頭では黒曜石の溶岩の層が2枚確認できる。1枚の厚さも1m弱であり原産地としては申し分ない規模である。



ガラス質で良質であり、すぐそばに遺跡が見つかったことから石器の石材としても利用されていた。

地学シートHP



地学Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

